

日本ブランドへの厚い信頼が拓く 中央アジアの可能性 ——中央アジアミッション報告



橋本 剛
はしもと たけし
日本・中央アジア・
コーカサス経済委員長
商船三井会長

中央アジアは、日本人にとって必ずしもなじみの深い地域ではないが、若年層の割合が高い人口構成と高度なデジタル化を背景に、大きな成長可能性を有している。ウズベキスタンは中央アジア最大で約4000万人の人口を擁し、年間約100万人が増加し続け、市場の拡大が続く。カザフスタンは域内最大の経済規模を持ち、一人当たりGDPはマレーシアに匹敵する。両国は資源国としての印象が強い一方、脱炭素化にも積極的に取り組む、IT・デジタル分野でも先進的な施策を進めている。

また、ロシアと中国を隣邦に持ちながら、対外関係の多角化を図り信頼できるパートナーとの関係強化を目指す点で、日本外交の方向性と一致する面もある。

こうした認識のもと、2025年12月に開催された「中央アジア+日本」ビジネスフォーラムのフォローアップとして、7月6日から10日にかけて、私が団長を務める13社24人の代表団がウズベキスタンとカザフスタンを訪問した。

IT変革と親日のウズベキスタン

ウズベキスタンでは、デジタル技術省、エネルギー省、投資産業貿易省、経済財務省の幹部と懇談したほか、ITパークや大学を訪問した。ミルザマフムードフエネルギー大臣(当時)との懇談では、日本との戦略的パートナーシップの進展に加え、日本の技術・設備、金融支援、人材育成が同国の発展に果たしてきた役割について、高い評価と期待が示された。また、大統領の指導のもとで改革が進み、外国投資を受け入れる環境が整いつつあり、日本企業による投資参画の例が増えていることも示された。今後の重点分野として、グリーンエネルギー・省エネ・エネルギー安全保障・水素などが挙げられたほか、輸出機械類の保守・サービス機能の現地化や、人材交流を進めたいとの意向も示された。また、



ウズベキスタンITパークを視察する一行

大臣からは具体的な案件リストをウズベキスタン側と日本企業の間で共有したいとの提案があり、今後のプロジェクト具体化につながることを期待される面談となった。

カシモフ投資産業貿易副大臣との懇談では、日本企業の高い技術力、品質、長期的な事業姿勢が評価され、ウズベキスタンの産業発展における重要なパートナーであるとの認識が示された。政府は、経済改革を進めており、例えば経済特区の活用などにも取り組んでいると説明があった。今後は人材育成・輸出志向型事業を組み合わせた長期的な協力を様々な分野で拡大したいとの意向が示された。日本側が、ビジネス遂行上の諸課題を提示したのに対し、副大臣は、同省が窓口となり、関

係機関との調整や案件ごとの障害解消に取り組むと回答した。

ウズベキスタンの親日的な土壌も両国関係を支えている。訪問したJapan Digital Universityは、日本語とITエンジニアリングを教育の柱とし、ビジネスマナーやコンプライアンスも含め、日本企業で活躍できるデジタル人材を育成する日系私立大学である。日本の提携大学との二重学位制度、長期インターンシップ、実務型教育を通じて、語学力、専門性、職業意識を一体的に養っている。こうした取り組みの背景には、ソ連に抑留された日本人による悲惨な強制労働により建設されたナヴォイ劇場の完成度が高いことで、日本に対する信頼と敬意が根付き、親日感情の

淵源にもなっているという、歴史の逆説を示すようなエピソードも学んだ。

重要鉱物と産業高度化の カザフスタン

カザフスタンでは、AI・デジタル開発省、産業・建設省、エネルギー省、運輸省などの幹部と懇談したほか、アスタナ・ハブというITスタートアップ施設を訪問した。ベクテノフ首相との懇談では、カザフスタンが政治・経済改革を進め、「公正で進歩的な国家」の実現を目指しているとの説明があった。首相は日本との関係を重視し、近年の貿易・投資や協力案件の拡大を評価するとともに、重要鉱物、エネルギー、デジタルなど幅広い分野で、日本からの投資が経済の長期的な競争力向上につながることに期待を示した。日本側からは、インフラ開発、デジタル基盤の整備、IT人材育成における協力を提案し、首相は、特にデジタル分野で協力余地が大きいとの認識を示した。ナガスパエフ産業・建設大臣との懇談では、日本との関係が戦略的なものと位置付けられ、産業分野における投資や共同事業が着実に拡大しているとの評価が示された。大臣は、重要鉱物を今後の協力の柱とし、多様な鉱物資源の対日供給、加工、関連設備・技術の導入を進めたいと表明した。日本側からは、環境に配慮した資源開発、産業・物流基盤、人材

育成、脱炭素技術での協力を提案し、大臣は、具体的案件への情報提供と実務支援を行い、新たな事業形成につなげたいと応じた。

今回の訪問を通じ、両国とも日本への期待は想像以上に大きいと感じた。個人的な実感となるが、どこか親しみを感じさせる東アジア的な人々の風貌、豊かな食文化、古代から続くオアシス都市遺跡の魅力などがあいまって、日本人にはなじみやすい要素が数多くある。また、両国において、日本および日本企業の技術力、品質、誠実な事業姿勢に対する信頼とブランド力が高いことを改めて確認した。今後は、こうした日本企業の強みを具体的な事業につなげ、両国における日本企業の活動を後押ししていくことが重要である。一方で、ウズベキスタン、カザフスタンはいずれも中央アジア地域における大国であるものの、世界全体でみれば、一国の市場規模は限定的である。そのため、今後の活動においては、両国を個別の「点」として捉えるだけでなく、中央アジア全体を一つの「面」として捉え、地域全体との関係を重層的に展開していく視点も重要である。在京大使館をはじめとする関係機関とも連携し、企業への情報提供を行い、日本・中央アジア・コーカサス経済委員会として、現地との対話とフォローアップを一層強化していきたい。



カザフスタン ベクテノフ首相(右)

提供：在カザフスタン日本大使館